

博士論文審査要旨

論文提出者： 鹿内信善(北海道教育大学学校教育講座教育心理学研究室教授)

論文題目 創造的に読むための支援方法についての研究
オリエンテーション設定法・フォーカシング法・物語法・看図作文
A study of guided creative reading
: the orientation approach, the narrative approach, and the figurative
- sign- interpretation approach

主査	早稲田大学特任教授	博士(教育学)広島大学	浜本 純逸
副査	お茶の水女子大学教授	博士(心理学)お茶の水女子大学	内田 伸子
副査	早稲田大学教授	博士(文学)早稲田大学	中嶋 隆
副査	早稲田大学教授		町田 守弘
副査	早稲田大学教授	教育学博士(東北大学)	麻柄 啓一

本論文の目的

テキストを読み、それを理解することは、本来創造的な営みである。人は、呈示されたテキストの表面的な意味以上の意味を創り出してテキストを理解している。1980年代のイーザーの『行為としての読書』以来、読者による「創造的読み」が注目されてきたが、その方法論が十分には開拓されてこなかったことに着目し、本論文では、「創造的読み」により積極的な役割を与え、新しい意味を能動的に創り出していくための「読み」を理論的に解明するとともに、教育的支援の方法として「創造的読み」をていあんしている。

著者は、「創造的読み」を次のように定義している。

「創造的読み」とは、目の前にあるテキスト情報と読者自身の既有情報を、変換・結合・補充等によって総合し、新しい意味を創り出すことである。

著者は、研究課題を5項目に分けて次のように掲げ、研究を進めたのである。

- (1) 創造的読みの構造とプロセスはどうなっているか。
- (2) 創造的読みを支援するとはどうすることが(方法)
- (3) 創造的読みをどのようにして作文教育につなげていくか
- (4) 創造的読みを支援するために、どのような教材を用意したらよいか
- (5) 「創造的読み」をなぜ支援しなければならないか。

著者が採用している方法は、「文献研究」と「実験的・実践的研究」での二つである。
第1章「『創造的読み』の歴史」第2章「『創造的読み』支援のための前提条件」と第7章
「『創造的読み』をなぜ支援しなければならないか」は、主として文献研究にもとづく知見をま
とめている。

第3章から第6章までは、実験的・実践的研究である。

著者は、説明文、物語、図など、次々と多様な様式の素材を使ってリサーチクエスト
ンに回答を与え、主体が読みとる意味構築(解釈)の過程についての実証的な証拠に基づき、
汎用性の高いモデルを構築していったのである。

本論文の構成

本論文は次のような構成になっている。

序 論

1. 研究目的と方法	1	1-1 「創造的読み」の定義
1-2 研究課題		
1-3 研究方法		1-4 研究の概要
第1章 「創造的読み」の歴史		
1-1節 「創造的読み」概念の歴史	9	
1-2節 国語科教育における「創造的読み」の歴史	13	
第2章 「創造的読み」支援のための前提条件		
第3章 オリエンテーション設定法による「創造的読み」の支援		
3-1節 「創造的読み」のモデル	59	
3-2-1 支援プログラムの概略		
3-2-2 オリエンテーション設定法による詩の解釈		
第4章 フォーカシング法による「創造的読み」の支援		
4-1節 「創造的読み」モデルとしてのフォーカシング	79	
4-1-2 フォーカシングとは何か		
4-2節 フォーカシング法に基づく詩の創造的読みモデル	88	
4-3節 フォーカシング法による支援プログラム	97	
4-3-6 フォーカシング法の中学生に対する集団実施		
第5章 物語法による「創造的読み」の支援		
5-1節 物語法の基本的考え	116	
5-1-1 オリエンテーションとしての物語構造		
5-2節 物語法による詩の創造的読み支援事例 - 大学生の場合 -	119	
5-3節 物語法による詩の創造的読み支援事例 - 小学生の場合 -	127	
5-3-2 物語法を適用してみた		

第6章 「創造的読み」の発展 絵図テキストを読む	
6-1節 中国における看図作文の指導	138
6-1-1 中国「国語科(語文)教育」における看図作文の位置づけ	
6-4節 看図作文を国語科教育に導入することの意義	179
6-4-1 看図作文とインベンション指導	
6-5節 看図作文の可能性	191
6-5-1 韓滉「五牛図」を用いた自己分析の授業	
6-5-2 高其佩「高崗独立図」を用いた自己分析の授業	
第7章 「創造的読み」を支援することの意義	208
7-1-1 「創造的読み」と「わたしがわたしとして生きる」こと	
結論と今後の課題	227
文献	279

・本論文の概要 その1

第1章ではまず、わが国における「創造的読み」概念の歴史について概観している。次に、「創造的読み」が、国語の授業にどのように取り入れられてきたか、その教育史を整理している。「創造的読み」に関する教育史研究によって次のことを明らかにしている。

テキストの読みに創造的プロセスが含まれるという考え方は、釈迦の時代にまでさかのぼることができほどに古からの問題であるにもかかわらず、「創造的読み」は近代の国語科教育の中では、十分には取り上げられてこなかった。

第1章では、山路兵一の「読書創造」、秋田喜三郎の「創作的読方教授」、飯田廣太郎の「創造的読解」、大村はまの「生産的読み」など、「創造的読み」と目標を同じくした概念を掲げて行われてきた実践を概観している。また、大塩卓・倉澤栄吉らの「創造的読み」の授業や理論についても考察し、著者の提案する「創造的読み」支援の方法との継承関係を明らかにしている。山路兵一・秋田喜三郎・飯田廣太郎・大村はまを真正面から追求し歴史的に位置づけることに成功している。また、現代的な課題である「読者論」及び「メディア・リテラシー」の側面に「創造的読み」の理論を持ち込み、それらの課題を方法論的に解明する試案を提出しているのである。

第2章では、「一般的読み」を分析して「創造的読み」研究の前提として、

1. テキストの要素的情報の読み
2. テキスト内情報を相互に関係づける読み
3. テキスト内情報と既有知識を関係づける読み

と捉えて「一般的読み」のモデルとしている。

その土台に立って、「創造的読み」の支援方法として、第3章「オリエンテーション設定法」第4章「フォーカシング法」、第5章「物語法」の3つを提案し、さらに、第6章において、絵図を創造的に読み解き、その内容を作文にまとめていく「創造的[読み書き]」の支援方法「看図作文」を提案している。

・本論文の概要 その2

-「創造的読み」支援方法の提案-

第3章 オリエンテーション設定法による「創造的読み」の支援

オリエンテーションとは、テキスト理解をするために採用する方向や方針である。具体的には、テキストにつけられた題、教師からの発問や指示などがオリエンテーションになる。読者は、これらのオリエンテーション刺激にしたがって、テキストをどのように読んでいくかを定める。理解に必要なオリエンテーションをあらかじめ設定し、テキストを創造的に読み解いていく方法がオリエンテーション設定法である。

本研究では、意味のわかりにくい現代詩(『ナ』藤富保男詩集 思潮社 1973)をテキストにしてオリエンテーション設定法を試み、それが「創造的読み」の有効な支援方法となることを多くの実践研究によって例証している。

第4章 フォーカシング法による「創造的読み」の支援

フォーカシングとは、自らが抱え込んだ「悩み」を読み解き、解決していくための臨床心理学的方法である。悩みを読み解くことと詩を読み解くことは似ている。本研究は、臨床心理学技法であるフォーカシングを応用した、「創造的読み」支援方法を開発した。それが「フォーカシング法」である。

臨床心理学技法としてのフォーカシングとは、次のようなものである。フォーカシングとは直訳すれば「焦点をあてる」という意味になる。人がこころの問題を抱え込んだ時、たいてい、体の中にも何が「感じられるもの」が生まれてくるという。ある問題について体が感じる全体的な感覚を「フェルトセンス」とよぶ。フェルトセンスは、ぼんやりした曖昧な全体的な感じにすぎない。しかしそこにはたくさんの意味が暗々裏に隠されている。隠されている意味が問題の本質であり、解決するための手がかりになる。

多様な暗々裏の意味を含んだ身体感覚=フェルトセンスに、注意の焦点を当てて十分に感じてみる。そして次に、そのフェルトセンスをうまく表現する「短いことば(ハンドル)」を探していく。フェルトセンスを言い表すうまい「ことば」が見つかり、フェルトセンスの中に隠されていた「意味」が浮かび上がってくる。そのことにより、問題の本質が理解され、問題が解決していく。悩みを読み解くこの方法は難解な現代詩の読み解きに活用できる、と仮設し「創造的読み」に応用したことが本論文の主要なアイデアである。

たいていの現代詩は難解で、意味を読み取ることができない。しかし、詩の意味が理解できなくても、わたしたちは、詩を読んだあと何かを感じることができる。それが、詩の読みのフェルトセンスである。そのフェルトセンスを十分に感じ取ってみる。そうすると、フェルトセンスをうまく表現する「短いことば(ハンドル)」を見つけることができる。この「短いことば(ハンドル)」が、詩を読み解いていくためのオリエンテーションになる。読者は、みつけた「ことば」をオリエンテーションにして、テキスト情報(詩文)と自己の既有知識を関連づけ、「創造的読み」をすすめていくことができる。これが「フォーカシング法」である。

本論文では、「フォーカシング法」を行うための実証的研究の二例を報告している。次にその部分的フェルトセンスを順にたどっていく方法の例である。

学習者は大学4年の女子学生。フォーカシングについての予備知識はもっていない。テキストとする詩は「かなしみ」(谷川俊太郎)である。

かなしみ

あの青い空の波の音が聞えるあたりに
何かとんでもないおとし物を
僕はしてきてしまったらしい

透明な過去の駅で
遺失物係の前に立ったら
僕は余計に悲しくなってしまった

(『谷川俊太郎詩集』思潮社1965。行数を示すために番号を付してある。)

空間をつくる = 問題をとりだす

学習者がとりだした問題点と、教示者があらかじめとりだしておいた問題点とを組み合わせ、次のように問題系列を構成した。

T28 そしたら、ちょっと問題点を整理してみよう。自分でちょっと書いてちょうだい。

L28 1番目がね、なぜ波の音が聞えるあたりに落としたのか。何を落としたのか、2番目ね。それから、これは君が出してきたんだね。過去の駅とは何なのか。それから4番目、なぜそれが透明なのか。それから、ちょっと、さっきわかったことなんだけど、なぜ余計に悲しくなったのか。それわかれば、この詩の意味わかるでしょ。

L29 (メモした問題点のリストを見ながら)うん。

フェルトセンス

T30 はい、そしたら順にかたづけたいこうね。じゃ、簡単なことなんだけど、まず青空をイメージして。どんなんでもいいけど、青空をイメージして。

L30 青空をイメージ?

T31 うん。

L31 できます。

T32 した? はい。そしたらね、その青空のところでは波の音が聞こえてくるよ。

L32 (沈黙6秒)うん。

T33 はい、イメージした?

L33 波の音?

ハンドルをつける

T34 うん。そしたらね、青空のイメージと波の音が聞こえてくる辺のイメージね。それに何かぴったりすることば、できるだけ短いことばをちょっと考えてみてちょうだい。

L34 えっ、ことば?

T 35 うん、そのイメージにぴったりすることば。
L 37 (沈黙16秒)なんか、広大。

.....(中略).....

解釈・問題解決

T 78 失恋。なるほどね。失恋。じゃ、失恋したのにどうして最初からのどかなイメージがでてくるの？

L 78 そうね。あっ、そう。その楽しかった思い出が、きっと、その、たとえば、青い空の下で遊んでいたね、そういう、ああ、おかしいな、うん。

.....(中略).....)

T 90 それがどうして透明なんだろう。

L 90 過去だから、過ぎ去ったことだから、透明になっちゃったんですよ。

T 91 あ、過ぎ去ったことだから透明になっちゃった。うん、それで4番目まで解決した。

T 92 じゃ5番目。

L 92 それで、思ってみても、もう自分のところには戻ってこないから、笑、青空見ても余計悲しくなってしまう。笑。

教師は、まず、テキストの言葉を手がかりに<読みの空間>を作り、「青空をイメージして。どんなんでもいいけど、青空をイメージして。」と<フェルトセンス>をかけ、「そのイメージにぴったりすることば」を与えさせ、読み解きの<ハンドル=なんか、広大>とする。ここまで来ると、学習者は、このハンドルを使って、その読み手なりの解釈をさせて問題を解決していく。

著者は、このような実験的な実践を重ねることによって、フォーカシングが「創造的読み」を支援する有効な方法であることを例証している。また、フォーカシング法は、学級のような集団学習事態でも適用できることも例証している。

第5章 物語法による「創造的読み」の支援

著者は、適切なオリエンテーションの自己設定が難しい場合のオリエンテーション自己設定法の一つとして、臨床心理学の手法を導入してフォーカシング法を提案したのであるが、さらに、いま一つ「物語構造」をモデルにしたオリエンテーション設定法を提案しその可能性を実証している。

美的(詩的)メッセージの解釈において、Barthes(邦訳1979)の「組み込み」理論と Propp(邦訳1972)の「物語構造」論を手がかりとしている。

Barthesの「組み込み」理論とは、物語を構成する下位レベルの諸単位を上位レベルのレベルに「組み込む」ことである。例えば、「手を差し出す、手を握る、手を離す」という諸単位は、「挨拶」と命名される行為項に組み込まれることにより、それぞれ有機的につながり、意味を持つようになる、とする。

Propp「物語構造論」は、物語には一定の構造があるとする説である。物語構造は、登場人物の行為によって構成されていて、物語をつくったり読んだりするために必要な規則(コード)になっている、とする。このコードに違反(飛躍・欠落、独自の暗喩、など)して文章が組み立てられると、意味が分かりにくくなる。

物語法による「創造的読み」とは、欠落している行為項を見つけ出し、適切な情報を補って、意味の分かりにくい表現を理解可能なものにする方法である。物語構造を処理モデルとして、意味のよく分からない表現を意味のある物語に書き換えていく読み方でもある。

コード違反をすることによって芸術的創造を達成している意味の分かりにくい詩の例として、鹿内は「のりおくれた天使」(石原吉郎)を取り上げて、実験を試みた。学習者は、行為項を組み込み、必要な情報を補って「創造的な読み」を達成した。

のりおくれた天使

電車にのりおくれた天使は / のりおくれたぶんだけ / 神様のほうへ / ひきもどされた /
電車にのりおくれた天使は / 神様のまえでだまっていた / 電車にのりおくれた天使を /
神様がおこらずに / 電車がおこった / 電車にのりおくれた天使に / つぎの電車はこなかった
た
(石原吉郎「北條」花神社1975)

鹿内は、「この詩の意味がよくわからないのは、物語構造の一部を欠落させているからである。したがって、欠落している行為項を見つけ出し、そこに適切な情報を補っていけば、この詩は理解可能なものになる。」と仮説して実践した。その結果、ある大学生(SK女)は「のりおくれた天使」を物語法によって、次のように創造的に読んでいる(ここでは、そのあらすじを示す)。

悪い運命が天使(少女)に電車(死につながる重い病気)に乗り遅れてはいけなかったと言った。神さまは声をとりにどすために電車(重い病気)とたたかいなさいと言った。

病気とたたかいながら少女は夢を見た。その夢には少女が幼い頃に死んだ母親ができて「病気に勝つ方法を教えてあげます。これを電車にむかってなげなさい。」ときれいな青い水しょう玉をくれた。少女はそれをもって死の国に向かった。そして電車に向かってそれを投げた。水しょう玉は強い光を放って電車とともに爆発した。

少女の手によってこわされた電車は、もう少女の所へ来るはずはなかった。少女は声をとりにどし、病気はだんだん回復の方へむかっていった。

物語法も、テキスト情報(詩文)と自己の既有知識を関連づけ総合し、新しい意味を創っていく読み方である。物語法は、大学生はもちろん、小学生にも適用可能な「創造的読み」の支援方法であることを、著者は実践的研究によって明らかにしている。

第6章「創造的読み」の発展 絵図テキストを読む

著者は、「創造的読み」の対象になるのは文章テキストだけではなく絵図も創造的に読み解いていくことができるとする。そして、国語科に絵図の読み解きが教材化されつつある現状を指摘し、その教育方法にも視野を広げている。

このため、絵図を読み解く活動を積極的に取り入れている中国の国語科(語文)教育を研究の手がかりとしている。中国では、とくに、絵図を読み解き、その内容を作文にまとめていく方法は「看図作文」とよばれている。鹿内氏は、中国で行われている看図作文の指導法を概観して、中国では、絵図を読むには、「すぐれた観察力」と「豊かな想像力」が必要であると説くが、どうすれば「すぐれた観察力」と「豊かな想像力」が発揮できるか、という研究がなされていないことを見いだしている。それに対して、鹿内氏は情報処理の観点から、絵図の理解過程を整理して、基本的には、変換(translation)・要素関連づけ(interpretation・解釈)・外挿(extrapolation)の3つの方法によって達成されると考え、そう考えることの有効性を実践を通して明らかにしている。

さらに、教師の発問によって進められる中国の授業に対して、小学校の渡辺聡教諭との共同研究によって、「子供が質問を作る、子どもが構成を考える」絵図の読み解き授業を行うと子どもが主体的にさん証して豊かな想像力を展開することを実証している。

また、中国の伝統である「五牛図」を用いた自己分析に見られるように、日本においても絵図の読み解きが「自己分析」を確かにし深めることを、北京の大学生と日本の大学生とを対象にして行った授業によって実証している。

著者によって提起された絵図の「創造的読み」の意義づけと方法的提起は、作文におけるインベンション育てになること、絵図を読み解く過程において言語化能力が育つこと、構成力・想像力を含めた想像力が育つこと、の三点において有効である。とりわけ、絵図の読み解きが、「自己を読み解く方法」なりえることを示唆しており、その応用可能性は、とくに高い。

第7章 「創造的読み」を支援することの意義

著者は、序論でたてた課題の「(5)創造的読み」をなぜ支援しなければならないか。」の答えを次の四点に見いだしている。

オリエンテーションを変えることによって新しい「わたし」を発見する。」

「わたし」が「わたし」として生きる独自性を創造的に見いだしていくために支援するのである。「わたし」を見いだしていく人間的能力を修練する

明日を生きる力を育てるために、自己の経験を創造的に読みとく力(想像力)を育てる。

情報化や会を生きていくために必要な、映像を批判的に読み解くメディア・リテラシーを育てる。

「相違する視点を統合する記号の力動性が生きる感じに直結する」として

有間の皇子の歌「家にあればけに盛る飯を草枕旅にしあれば椎の葉に盛る」が分かった時の自己の読みの体験をもとに、創造的読みは、「生きている感じ」実感させる。その「生きている感じ」をもたらすために創造的読みの力を育て体験させる必要がある。

第7章は、「創造的読み」の理論を「自己の生き方を読む」ことにまで敷衍しようとし

たため、やや論理的な飛躍が見られる。この飛躍を実験と論理によって着実に埋めていくことが著者の今後の課題であろう。しかし、この課題の指摘は、本論文の価値を下げるものではない。この研究をいっそう理想に近づけるために著者の人生観の深まりと理論の成熟に待ちたい、ということである。今は、「生きている感じ」を育てる、というきわめて教育的に高い境地をめざす地点に達していることが評価されるのである。

本論文の評価

以上、本論文の目的、構成、各章の概説及びそれへの論評を行ってきたが、総評としてまとめれば、次のようになる。

1) 本論文は、1980年代にイーザーによって提起されて以来、さまざまに「読者論に立つ読み」が論じられながら、その支援の方法論に関しては未だ確かなものを見いだしていない現状において、教育心理学を背景に持ちながら、国語教育実践史、文芸研究、臨床心理学、認知心理学、認知科学などの古今・内外の文献によく目配りし、学際的な視点で「創造的な読み」の本質と方法論を確かな構築をしている。

2) 国語教育実践史の成果と教育心理学の知見とを相互作用させて生み出された支援の方法論は実用に耐えうる説得的で具体的なモデルとなっている。確かな「創造的な読み」の支援方法が提案されているのである。オリエンテーション法と物語法の研究は新しい着実な提案となっているが、とくにフォーカシング法を適用した教授・支援プログラムはきわめて独創的であり、単に「読みの過程」解明にとどまらず、人が生きることの意味を見出す過程として実証的証拠に基づき検証を繰り返し、それに基づき国語教育の実践者にも使用可能なモデルに洗練させ得た点は、高く評価できる。

3) さらに、中国の看図作文を研究し、新たにわが国の国語教育における絵図活用の作文教育実践と認知心理学の方法とを組み合わせ、絵図のリテラシーにまで発展させてい汎用性の高いモデルを作り上げていることは高く評価される。わが国の国語科教育界において、「見ること〔seeingを「話す」「聞く」「書く」「読む」の4領域に加えて5領域にすべきであるという議論がなされている現在、国語教育界にアクチュアルな問題提起をしており、注目すべき提案となっている。「創造的な読み」の絵図リテラシーへの方法的展開は、今後の映像を中心としたメディアリテラシーの実践的研究へも示唆するものを持っており、今日的な意義の深い研究となっている。

以上から、審査委員一同、総合的に判断して本論文が博士の学位を授与するに値すると一致した見解を持つに至ったので、ここに報告する。